

提婆品に云はく「仏、諸の比丘に告げたまはく、未来世の中に、乃至蓮華より化生せん」等云云。此の提婆品に二箇の諫曉あり。所謂達多の弘教は釈尊の成道を明かし、又文殊の通経は竜女の作仏を説く。されば此の品を長安宮に一品切り留めて、二十七品を世に流布する間、秦の代より梁の代に至るまで、七代の間の王は二十七品の経を講読す。其の後満法師と云ひし人、此の品法華経になき由を読み出され候ひて後、長安城より尋ね出だし、今は二十八品にて弘ませ給ふ。

さて此の品に淨心信敬の人のことを云ふに、一には三悪道に墮せず、二には十方の仏前に生ぜん、三には所生の処には常に此の経を聞かん、四には若し人天の中に生ぜば勝妙の樂を受けん、五には若し仏前に在らば蓮華より化生せんとなり。然るに一切衆生、法性真如の都を迷ひ出でて妄想顛倒の里に入りしより已来、身口意の三業になすところ、善根は少なく悪業は多し。されば経文には「一人一日の中に八億四千の念あり。念々の中に作す所皆是三途の業なり」等云云。我等衆生、三界二十五有のちまたに輪回せし事、鳥の林に移るが如く、死しては生じ、生じては死し、車の場に回るが如く、始め終はりもなく、死し生ずる悪業深重の衆生なり。爰を以て心地觀経に云はく「有情輪回して六道に生ずること猶車輪の始終無きが如く、或は父母と為り男女と為り生々世々互ひに恩有り」等云云。法華経の二の巻に云はく「三界は安きこと無し、猶火宅の如し、衆苦充滿せり」云云。涅槃経二十二に云はく「菩薩摩訶薩、諸の衆生を觀ずるに、色香味觸の因縁の為の故に、昔無量無量劫より已来、常に苦惱を受く。一々の衆生一劫の中に積もる所の身の骨は王舎城の毘富羅山の如く、飲む所の乳汁は四海の水の如く、身より出だす所の血は四海の水より多く、父母・兄弟・妻子・眷属の命終に涕泣して出す所の目涙は、四大海の水より多し。地の草木を尽くして四寸の籌と為して以て父母を数ふるに亦尽くすこと能はじ。無量劫より已来或は地獄・畜生・餓鬼に在って受くる所の行苦称計すべからず。亦一切衆生の骸骨をや」云云。是くの如くいたづらに命を捨つるところの骸骨は毘富羅山よりも多し。恩愛あはれみの涙は四大海の水よりも多けれども、仏法の為には一骨をもなげず。一句一偈を聴聞して、一滴の涙をもおとさぬゆへに、三界の籠樊を出でず、二十五有のちまたに流転する衆生にて候なり。

然る間、如何として三界を離るべきと申すに、仏法修行の功力に依って、無明のやみはれて法性真如の覺りを開くべく候。さては仏法は何なるをか修行して生死を離るべきぞと申すに、但一乘妙法にて有るべく候。されば慧心僧都、七箇日加茂に參籠して、出離生死は何なる教にてか候べきと祈請申され候ひしに、明神御託宣に云はく「釈迦の説教は一乘に留まり、諸仏の成道は妙法に在り、菩薩の六度は蓮華に在り、二乗の得道は此の経に在り」云云。普賢経に云はく「此の大乗經典は諸仏の宝蔵なり、十方三世の

諸仏の眼目なり、三世の諸の如来を出生する種なり」云云。

此の経より外はすべて成仏の期有るべからず候上、殊更女人成仏の事は此の経より外は更にゆるされず、結句爾前の経にてはをびたゞしく嫌はれたり。されば華嚴経に云はく「女人は地獄の使ひなり、能く仏の種子を断ず、外面は菩薩に似て内心は夜叉の如し」云云。銀色女経に云はく「三世の諸仏の眼は大地に墮落すとも、法界の諸の女人は永く成仏の期無し」云云。或は又女人には五障三従の罪深しと申す。其れは内典には五障を明かし、外典には三従を教へたり。其の三従とは、少くしては父母に従ひ、盛んにしては夫に従ひ、老いては子に従ふ。一期身を心に任せず。されば榮啓期が三樂を歌ひし中にも、女人と生まれざるを以て一樂とす。天台大師云はく「他経には但菩薩に記して二乗に記せず、但男に記して女に記せず」とて、全く余経には女人の授記これなしと釈せり。其上、釈迦・多宝の二仏塔中に並坐し給ひし時、文殊、妙法を弘めん為に海中に入り給ひて、仏前に帰り参り給ひしかば、宝浄世界の多宝仏の御弟子智積菩薩は竜女成仏を難じて云はく「我釈迦如来を見たてまつれば、無量劫に於て難行苦行し、功を積み徳を累ね、菩薩の道を求むること未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至芥子の如き許りも是菩薩にして身命を捨てたまふ処に非ざること有ること無し。衆生の為の故なり」等云云。所謂智積・文殊再三問答いたし給ふ間は、八万の菩薩・万二千の声聞等、何れも耳をすまして御聴聞計りにて、一口の御助言に及ばず。然るに智慧第一の舍利弗、文殊の事をば難ずる事なし。多くの故を以て竜女を難ぜらる。所以に女人は垢穢にして是法器に非ずと小乗権教の意を以て難ぜられ候ひしかば、文殊が竜女成仏の有無の現証は今仏前にして見え候べしと仰せられ候ひしに、案にたがはず八歳の竜女蛇身をあらためずして仏前に参詣し、価値三千大千世界と説かれて候如意宝珠を仏に奉りしに、仏悦んで是を請け取り給ひしかば、此の時智積菩薩も舍利弗も不審を開き、女人成仏の路をふみわけ候。されば女人成仏の手本是より起こりて候。委細は五の巻の経文之を読むべく候。

伝教大師の秀句に云はく「能化の竜女歴劫の行無く、所化の衆生も歴劫の行無し。能化所化俱に歴劫無し。妙法経力即身成仏す」と。天台の疏に云はく「智積は別教に執して疑ひを為し、竜女は円を明かして疑ひを釈く。身子は三蔵の権を挾んで難じ、竜女は一実を以て疑ひを除く」と。海竜王経に云はく「竜女作仏し国土を光明国と号し、名をば無垢証如来と号す」云云。法華已前の諸経の如きは、縦ひ人中天上の女人なりといふとも成仏の思ひ絶えたるべし。然るに竜女、畜生道の衆生として、戒緩の姿を改めずして即身成仏せし事は不思議なり。是を始めとして、釈尊の姨母・摩訶波闍波提比丘尼等、勸持品にして一切衆生喜見如来と授記を被り、羅睺羅の母・耶輸陀羅女も眷属の比丘尼と共に具足千万光相如来と成り、鬼道の女人たる十羅刹女も成仏す。然れば尚殊に女性の御信仰あるべき御経にて候。

抑此の経の一文一句を読み、一字一点を書く、尚出離生死証大菩提の因なり。然れ

ば彼の字に結縁<sup>けちえん</sup>せし者、尚<sup>えん</sup>炎魔<sup>ま</sup>の序より帰され、六十四字を書し人は其の父を天上へ送る。何に況んや阿鼻の依正は極聖の自心に処し、地獄・天宮<sup>これかじ</sup>皆是果地の如来<sup>びる</sup>なり。毘盧の身土は凡下の一念を<sup>こ</sup>逾えず、遮那<sup>しゃな</sup>の覚体も衆生の迷妄を出でず。妙文は靈山浄土に増し、六万九千の露点は紫磨金<sup>しまこん</sup>の輝光<sup>そ</sup>を副へ給ふべし。殊に過去<sup>しやうりやう</sup>聖靈は御存生の時より御信心他に異なる御事なりしかば、今日<sup>こうきやう</sup>講經<sup>くりき</sup>の功力に依って仏前に生を受け、仏果菩提の勝因に登り給ふべし云云。南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經。